江戸城錦絵(国立歴史民俗博物館蔵)

連載 第4回

東北の川村孫兵衛、江戸の玉川兄弟

作家 高崎 哲郎

川村孫兵衛：北上川・治水の祖

北上川と仙台藩の繁栄

石巻で太平洋にそそぐ大河北上川の恩恵は石巻地域だけでなく、江戸時代は仙台藩領全域に及んでいた。岩手県から宮城県に南流する北上川は、全長249キロメートル、流域面積1万150平方キロメートルで、延長では全国5位、流域面積では4位という、東北最大の一級河川だ。岩手県の中央部を南に流れ、県境から宮城県登米郡に入る。宮城県に入った北上川は、津山町柳津付近から2つに分かれ、柳津から南に流れさらに東に向きを変えて追波(おっぱ)湾にそそぐ流路と、柳津から西に流れて迫川(はざまがわ)と、さらには江合(えあい)川と合流して石巻湾にそそぐ旧北上川に分かれる。

仙台藩(62万石)の藩祖伊達政宗は、戦国時代にかかえた多くの家臣団を藩内各地に配置し、領内の産業発展に取り組んだ。金山開発、砂金精錬、桑・漆・竹・茶などの有用植物の栽培、杉・桐などの植林、製塩などを奨励した。次いで、新田開発に取り組み、コメの増産を図るため、北上川の改修に挑んだ。

この改修計画は乱流する流路を一定にするために堤防を築き、これによって①洪水を防止するとともに、②流路のあとの低湿地を新田として開発し、大穀倉地帯としてコメの増産を図ること、③さらには領内のコメを輸送するための舟運を整備し、発展途上にある江戸にコメを運び(江戸廻米)、これを売って利益をあげようという壮大な計画だった。

仙台藩経済の中心となる江戸廻米は江戸初期元和年間(1615－1624)から行われていたが、北上川改修工事と石巻開港はこれをさらに大規模かつ円滑にするためのものだった。そのために地方巧者(じかたこうしゃ)川村孫兵衛が登用された。

現在の北上川

川村孫兵衛の人と功績

川村孫兵衛重吉(1575－1648)は、もと毛利家の家臣で、関ヶ原合戦後に浪人となった。近江国蒲生郡(がもうぐん)(現滋賀県蒲生郡)で伊達政宗に召し出され、慶長6年(1601)に仙台に招かれ、金山開発、製塩、新田開発、北上川改修工事に従事したとされる。孫兵衛については『仙台人名辞典』には次のように記述されている。

「土功家(土木技術者)で孫兵衛と称す。長州(山口県)の人、落ち着い

ていて勇気があり、数学や土木技術・水利・天文・測量を学んで毛利輝元に仕えていたが、慶長年間に仙台に来て伊達政宗に仕えた。政宗は500石を与えようとしたが、孫兵衛はこれを辞退し荒地を受けて新田として開発することを願い出て100石と荒地を賜わり、これを開発して1000石余の土地とした。のちに3000石余となり、そのうち1200石を娘婿の元吉（もとよし）に譲った」。

「孫兵衛は政宗の命を受けて、北上川の流れを分けて南に流して石巻港を開いた。昔の牡鹿湊には真野川だけがそそいでいたが、原野や山を掘削して堤防を築き、元和9年（1623）より寛永3年（1626）の4年間で、北上川を真野川に合流させて石巻に至って海にそそがせたことにより、地勢は大きく変わった。正保年間（1644-1648）のこと、仙台藩二代藩主忠宗が牡鹿半島の鹿狩りの途中に、孫兵衛重吉の屋敷に立ち寄ったことに感激し、その屋敷の材料で寺の建立を思い立った。しかし病気となってしまい、慶安元年（1648）10月に74歳で亡くなった。この志をついで息子の元吉が寺を建立し、普誓寺（ふせいじ）（真言宗）と称した。これを聞いた忠宗は寺領として63石を与えたという」。

北上川改修に挑む

工事の費用は莫大であったとみられるが、藩の財政は豊かではなく、賃金を調達するため孫兵衛は流域や領内各地の素封家から借金をしたようである。石巻市内などで、孫兵衛署名の借用証文が見つかっている。

川村孫兵衛の北上改修工事は、①江合川と迫川を合流させること、②柳津と飯野川（河北町）との間の流れを止めること、③合流させた二つの川と北上川の西流とを合流させること、だった。そして江合川と迫川の合流工事は元和2年（1616）に完成し、元和9年から寛永3年（1626）にかけて、北上川との合流工事が完成した。そのねらいは、北上川・迫川・江合川の流路を整理統合して真野川に合流させ、流量を調節すること、川幅を広げ、堤防を築いて洪水を防止すること、舟運を便利にすること、灌漑用水を確保することという新田開発に関わる大工事であった。

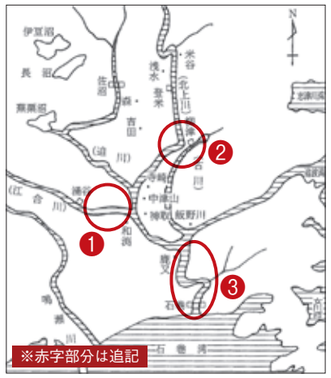
この掘削工事では、川を掘るのに箱掘りという特殊な方法を用いた。川にしようとする土地を、ある間隔を置いて短冊形に掘っておき、増水期に一部を切り取って水勢を利用して一気に川にしてしまうという工法だ。孫兵衛の考案だとされる。孫兵衛による北上川改修工事の結果、河口に石巻の港町が形成された。石巻は北上川舟運の終点、江戸廻米の東回り海運の基地となり、仙台藩の経済発展に直結する港として整備されていく。北上川改修工事完成後から、元禄初期（1688年頃）までの約50年間に石巻の港町として機能、施設が整えられた。

元禄2年（1689）、俳人松尾芭蕉と門弟の曽良は石巻を訪れ、『おくのほそ道』に「こがね花咲くとよみ奉りたる金花山※（原文のまま）、海上に見わたし、数百の廻船入江につどい、人家地をあらそいて竈（かまど）の煙り立ちつづけたり」と記し石巻の繁栄に感嘆している。

※石巻の東南牡鹿半島の先にある島

慶長以前の流路

出典：石巻市史編さん委員会（1992）『石巻の歴史 第6巻（特別史編）』石巻市 P543



川村孫兵衛改修工事後の流路

出典：石巻市史編さん委員会（1992）『石巻の歴史 第6巻（特別史編）』石巻市 P557

参考　川村孫兵衛の主な河川改修

1. 江合川と迫川を合流させること
2. 柳津と飯野川との間の流れを止めること
3. 北上川、迫川、江合川の流路を整理統合して真野川に合流させること

日和山公園の川村孫兵衛像（宮城県石巻市）

玉川兄弟、玉川上水は今も「現役」

大江戸の発展と上水確保

慶長5年（1600）関ヶ原合戦に勝利した徳川家康は、諸国の大名に御手伝普請を命じ江戸城の拡張工事を行った。その後も二代将軍秀忠、三代将軍家光も数次にわたり江戸城の巨大な城づくりと江戸の街づくりを行った。天下一の城下町として、江戸の街の範囲が拡大するに伴い、飲料水の需要も増大した。このため、小石川上水は拡張工事が進められ、寛永年間（1624-1644）には神田上水として確定した。

神田上水の成立後、江戸の市域はさらに拡大し、神田上水が供給する水量ではまかなうことが出来なくなった。幕府は神田上水とは別の新しい上水道を建設する必要性に迫られた。そこで、承応元年（1652）12月、多摩川（玉川）から水を引く玉川上水の開削が計画された。

玉川上水は、多摩川の水を奥多摩の羽（は）村（むら）（現羽村市）の取水口で取り入れ、四谷大木戸（現千代田区の四谷四丁目交差点付近）まで延びる一大土木事業である。水道の高低差を巧みに利用した自然流下方式であり、江戸市中の末端までにも円滑な給水が行えるように、羽村と四谷大木戸の標高差約92メートルを利用して、武蔵野台地の馬の背に当たる箇所にルートが設定されている。羽村から四谷までの43キロは開渠で、四谷大木戸からは地中を通し、四谷門外の箱樋（はことい）で3つに分け

られる。一つは江戸城へ、もう一つは麹町へ、残りの一つは四谷伝馬町一帯から紀伊国坂（北の丸公園にあった坂）を下り、虎ノ門・芝・築地・八丁堀・京橋辺りまで給水される。

玉川兄弟と玉川上水

玉川の開削は、庄右衛門と清右衛門の兄弟が請負人になって行われた。兄弟は江戸の町人とも多摩地方の農民とも伝えられている。玉川兄弟が、多摩川沿岸に縁のある人物であることは、容易に想像される、さもなければ山間地の羽村（現羽村市）から多摩川の水を引き入れるという卓越した構想は出てこない。

羽村の旧名主加藤家には玉川兄弟が羽村の生まれであることを示唆する古文書が残されているという。「徳川実記」（徳川将軍家正史）の承応2年（1653）正月13日に「芝口之町人水道之儀訴之処、則相済賜金七千五百両、水筋は玉川より取之」と記してある。この時多摩川から水道工事を請負うことを申し出たのが芝口町人と記している。これが庄右衛門と清右衛門の兄弟であると考えられる。

『上水記』（当時の普請奉行上水方道方石野遠江守広道が記した工事記録）の正徳五年（1715）庄右衛門、清右衛門の二代目が差し出した書状を見ると、町奉行神尾元勝が大体の計画を立てて、この2人に請負わしめた様子が見られる。町奉行神尾、川越藩士安松金右衛門らの腹案があらかじめ両人に示されて両人がこれを承諾して引き受けたものである。

玉川兄弟像（東京都羽村市）

巨額な工事費

『上水記』によれば、兄弟へは幕府から工事費用として6000両（今日の60億円余）が与えられ、承応2年4月から工事が開始された。だが難工事続きで、高井戸辺りまで掘り進んだところで、幕府から与えられた工事費を使い切ってしまった。そこで2人は、自分たちの持ち金2000両と、町屋敷を売り払った1000両とで、残りの工区を掘り進め、ついに同年11月四谷大木戸まで完成させたという。

だが別の説もある。2人の兄弟は、最初は玉川の中流にあたる日野（現日野市）の渡しに近い青柳村（現国立市）の辺りから取水しようと計画して失敗し、次に上流の福生村（現福生市）辺りから取水しようとしたが、これも途中の「みずくらいど」（浸透性の高い関東ローム層）と呼ばれる熊川付近（現福生市の水喰土公園）で水が地中にしみ込んでしまい、再度失敗に終わった。そこで3度目には、川越（現埼玉県）藩主松平伊豆守信綱の家臣である安松金右衛門に設計させ、羽村の取水地点を確定して初めて成功したとされる。「徳川実記」の承応3年6月20日に「玉川上水完成、当地之用水来候に付き、事を承りし市人に褒美として金子三百両下さる」と記してある。

玉川上水の完成後は、庄右衛門・清右衛門の兄弟は、玉川という名字を名乗ることを許され、上水役として扶持米（俸禄米）を与えられている。

通水後の経営請け負い

玉川上水の開削後、庄右衛門と清右衛門の兄弟は、上水の経営を請け負うこととなり、万治元年（1659）からは上水の修復料として江戸市中の武家や町方から水銀（維持管理料）を徴収している。これ以降、2人の子孫は代々庄右衛門・清右衛門を名乗り、元文四年（1739）に両家とも三代目が改易されるまで、上水役として代々玉川上水の維持管理を行った。羽村、代田村（現在の京王線代田橋駅付近）さらに四谷大木戸には水番所（水番屋）がおかれ、水番人が詰めて塵芥（ごみ）の除去などを行っていた。

往時から名水として知られる多摩川の水を朝夕使えることに感謝した江戸市民は、水道水は飲用、炊事用にしか使わず、洗濯や行水には井戸水を使うよう心掛けた。

玉川上水と武蔵野開発

玉川上水は、本来江戸城やその町々への上水を目的としていたが、武蔵野の村落の開発が進むにつれて、次第に流域の村々の農業用水や飲料水としても利用されるようになった。羽村から四谷大木戸までの間には野火止用水をはじめ多くの分水が存在した。分水は最も多い時には33に上った。これらの各分水を利用している村々は使用料として水料を納めることになっていたが、享保・元文年間（1716－1741）に開発された武蔵野新田村々への分水については幕府が保護政策を行ったため、水料が徴収されなかった。

玉川上水の小金井橋の上下流とも2里（約8キロ）の間には、元文2年（1737）に代官川崎平右衛門によって桜が植樹された。

歌川広重「江戸名所百景」の玉川上水

玉川上水は開削から約400年を経た今日も「現役」である。羽村取水堰で多摩川の水を取水し、東流する。多摩川水系は東京都の上水源の3分の1ほどを占めており、毎秒17・2立方メートルの水が水道用水として利用されている。

参考文献：国土交通省北上川下流事務所作成資料、『人づくり風土記』（宮城）。
羽村市資料、『人づくり風土記』（東京）、小説『玉川兄弟』（杉本苑子）。
筑波大学付属図書館文献。